

アジアの気候変動解明へ

名古屋大は二〇〇九年から、アジアの農工業生産など人間の経済活動と気候変動との相互作用の解明に向けた研究を本格化させる。人間活動により大気中に放出される微粒子の影響も評価に加えることで、温暖化や頻発する集中豪雨などの気候変動の正確なメカニズム解明につながる」と期待される。

研究は〇八年三月に発足した地球生命圏研究機構を中心に進める。地球科学や生物学、都市工学などの幅広い学問領域の研究者が協力し、環境と調和した人間活動のあり方を探る。将来の食糧生産にもかかわり、民間企業との共同研究も視野に入れていく。

耕地化のための森林伐採や大気汚染などにより、大気中には化学物質などさまざまな微粒子が放出されている。だが、これらが気温や雲の形成などを与える影響は十分には解明されていない。

名大は既にアジア上

名大が研究本格化 人の影響調査

空の微粒子の濃度変化などを計算で導き出せる気候モデルの開発を終えており、今後はこれを用いた気候変化の予測や、人工衛星からの観測などを基にアジア地域の降水量や気温の変化に与える影響を調べる。

同機構長の安成哲三教授(気象・気候学)は「中国やインドを含むアジア地域で大気中に放出されている微粒子は非常に多く、気候に与える影響は無視できない。これが気候に与える影響を正確に把握して、温暖化などの総合的な対策につなげたい」と話している。